



[令和元年10月9日 定例会発表要旨]

## 国体に行った手稲町役場野球チーム ～伝説を創った人々の記録～

木の実歯科 院長 蓑輪 隆 宏 氏

手稲区が手稲町だったその昔、伝説の手稲町役場野球チームがあったことをご存知だろうか。どれほどの凄いチームだったのか、その一端を記す。

戦時中、中止されていた野球をやりたい、そして野球で手稲のまちを元気にしたいと強く願ったのが、当時の村長でありのちの町長 蓑輪早三郎だ。最初は手稲神社祭礼の試合や部落対抗戦から始まった町の野球だったが、少しずつチームが増えていくにつれ、役場チームも強くなっていく。



手稲町役場庁舎(奥)と  
竣工時の議事堂(手前) 〈1953年〉



石狩支庁管内町村職員対抗野球大会  
初めての優勝チーム 〈1953年〉

初めての優勝は1953(昭和28)年、石狩管内の他の町村と競った『石狩支庁管内町村職員対抗野球大会』だった。練習は雪や大雨が降らない限り、手稲中央小学校のグラウンドで毎日行われ、加えて大会前ともなると役場隣の洋裁学校で合宿を張り、出勤前の朝練そして終業後の練習は日が暮れるまでと、それはそれは大変なものだった。二度目、三度目の優勝も1957(昭和32)年、1959(昭和34)年の同大会だった。町の発展とともに役場の職員も増え、新たに有望な選手がチームに加わり、猛練習と相まってさらに力を付けた。

そして、1960(昭和35)年には『高松宮賜杯全日本選抜軟式野球大会二部北海道大会』でいきなり優勝し、徳島県鳴門市で行われた全国大会に



高松宮賜杯全日本選抜軟式野球大会二部  
北海道大会 優勝 〈1960年・紋別市〉

進んだ。一回戦不戦勝のあと、二回戦は宇和島食料(四国代表)、準決勝では日通神戸(近畿代表)を退け、あれよあれよという間に決勝に進出した。緊迫した決勝戦は皆の想いが結集し、延長11回の末、強豪 田村電気(東北代表)を4対2で下して奇跡的な初出場初優勝を果たした。9月12日月曜日、午後4時19分、手稲駅着の列車で帰町した選手を笠山助役はじめ多くの町民が出迎え、手稲駅前からスタートしたパレードは紙吹雪や紙テープが舞うなか、役場まで続いた。議事堂で開かれた祝勝会はお互いの健闘を称え、笑顔溢れる素晴らしいものだったようだ。なお、この年のチーム年間戦績は34戦29勝4敗1分の驚異的な数字だった。



高松宮賜杯全日本選抜軟式野球大会二部  
全国優勝 手稲に帰町時のパレード 〈1960年〉



第17回国民体育大会 軟式野球  
北海道予選 優勝 (1962年・北見市)



第17回国民体育大会 軟式野球  
入場行進 (1962年・岡山市)

ランク格上げとなった役場チームは、その翌年、今度は『高松宮賜杯 全日本選抜軟式野球大会 一部 北海道大会』でまたしても優勝し、北海道代表となり、富山市で行われた全国大会に進んだ。東洋バエ武庫川（近畿代表）、日本硝子（東海代表）、野球どころの二チームを下し二年連続の決勝だ。決勝は これまた強豪の日立造船神奈川工場（関東代表）が相手で、試合は延長戦にもつれ込んだ。結果は延長 10 回 惜しくも 1 対 2 で敗れはしたが、準優勝に輝いた。なお、この負けは札幌予選から数えて 12 試合目のことだった。

その後、役場チームは、さらに B 級から最もレベルの高い A 級に格上げされ、国体予選に出場する。1962（昭和 37）年、激戦の札幌支部予選を勝ち上がり、全道の強豪ひしめく『第 17 回 国民体育大会』軟式野球 北海道予選大会（北見市）に進出した。一回戦、置戸林友、延長 15 回、川上選手のサヨナラホームランで 1 対 0。二回戦、富良野第二戦車大隊、逆転の 5 対 4。三回戦、

函館市役所 2 対 1。準決勝、北炭夕張 2 対 1。決勝は地元の北見市役所 2 対 0。5 試合の死闘を制してこれも初出場で優勝し、岡山市で開催された国体本大会へと進んだ。第一戦で四国代表の香川電電に 0 対 1 で惜敗したものの、「天皇皇后両陛下がご臨席された 夢にまでみた総合開会式に 北海道代表として参列できたことは本当に嬉しかった」と、その時の主将、亦野選手は語っている。

このほか『天皇杯』、『たそがれ野球大会』、官公庁の大会などでも輝かしい成績を収め、手稲町役場チームは、札幌地区、石狩管内、北海道にとどまらず全国にその名を轟かせた。今でこそ設備が整いあまり聞かれなくなったが、当時 歴然としてあった北海道野球界の雪のハンデを見事に克服してのこれらの結果は、とても価値あるものだと考える。「ていね」を元気にしたいと頑張った選手、職員そして物心共に熱烈応援しチームを支えた地元の人々に、最大級の敬意と心からの感謝を表し、伝説の手稲町役場野球チームの凄さのまとめとする。

以下に、彼らの魂の戦いざまの結果 ― 主な戦績を示す。1953（昭和 28）年：石狩支庁管内町村職員対抗野球大会優勝、1959（昭和 34）年：石狩支庁管内町村職員対抗野球大会優勝、1960（昭和 35）年：高松宮賜杯全日本選抜軟式野球大会二部優勝（鳴門市）、1960（昭和 35）年：第 7 回たそがれ野球大会準優勝（札幌市）、1961（昭和 36）年：高松宮賜杯全日本選抜軟式野球大会一部準優勝（富山市）、1961（昭和 36）年：第 8 回たそがれ野球大会優勝、1962（昭和 37）年：第 17 回国民体育大会軟式野球北海道予選大会優勝・本大会出場（北見市・岡山市）、1964（昭和 39）年：第 19 回天皇杯全日本軟式野球大会北海道大会第三位（美唄市）、1964（昭和 39）年：全国官公庁軟式野球北海道大会優勝、1965（昭和 40）年：石狩支庁管内町村職員対抗野球大会優勝、1965（昭和 40）年：第 19 回国民体育大会軟式野球北海道予選大会準優勝（静内町）。

手稲町最後の年となる 1966（昭和 41）年は、目立った戦績が残っていない。なぜなら この年の 6 月 3 日、手稲東小学校で発生した集団赤痢の対応（消毒・隔離・搬送作業など）が 8 月まで続き、練習どころではなかった。そしてその秋、菅 野球部部长、青池 監督以下、総勢 23 名の戦士による札幌市との合併に伴う解散会が行われ、手稲町役場野球チームの輝かしい栄光の歴史を閉じた。



第 8 回たそがれ野球大会の  
優勝を伝える新聞記事 (1961 年)

## ● 出版余話 (2)

## 緑の専門家との面会

『北海道・緑の環境史』や『緑の文化史—自然と人間のかかわりを考える』を著し 野幌森林公園や北海道自然保護協会などで長年活躍された 俵 浩三<sup>たわらひろみ</sup>さんに、9月30日、再びお目にかかった。今回は、当研究会の濱埜静子さんと乙黒通子さんも加わり、かなりにぎやかになった。

車椅子にびっしり本を積み込んでやって来られた 俵さんは、いきなり14歳で体験した 東京大空襲の話を始められた。そして、「これが私の原点なんです」と語られた。「裸の町を 緑の町へ復興したい」と、強く思われたのだという。千葉大学園芸学部在学時には 学業のかたわら厚生省の臨時職員「緑の公園レンジャー」として上高地へ入られ、北海道で 阿寒や洞爺などをまわって 山と溪谷社のガイドブックにも記事を執筆していたところ、指導教授から「観光なんかより もっと大事なことに取り組まないか」と言われ、目が醒められたそうだ。

俵さんが 若い時に最も感動した本として紹介してくれたのが、湊正雄 著『後氷期の世界』だった。この本で自然保護の考え方を学ばれたという。『思い出の昭南博物館—占領下シンガポールと徳川侯』を書いた E. J. H. コーナー博士が来道した折には俵さんが案内し、東大の富良野演習林の高橋延清 演習林長（どろ亀さん）を訪ねたそうで、楽しい思い出も語ってくれた。「私の名前はハイブリッジ、私の研究はハイブリッドです」と高橋 演習林長がユーモラスに自己紹介したこと、幼木の生長について「私の入る棺桶の大きさくらいにはなりません」と説明した演習林長に「それでは私のも一つお願いします」とコーナー博士が言って笑い合ったことなど。

おいとまの際、乙黒さんは 照れて嫌がる俵さんにサインをおねだりして ご著書を購入し、私は 四手井綱英 著『森林』、高橋延清 著『林分施業法』、林野庁林業講習所 編『北海道の造林の要点』の3冊をお借りした。『森林』から読み始めたところ 興味深く、早速ネットで中古本を購入した次第だ。

私の『北海道造林合資会社物語』の出版を契機として この半年あまり、友人をはじめ諸先輩から 励ましのお言葉や、有益な著書など様々な情報のご提供をいただいた。本当にありがたく、また誠に分に過ぎる光栄と思わずにはいられない。

沖田 紘昭（手稲郷土史研究会 会員）

### 遺構・遺物は語る

### 星置の崖

星置は、アイヌ語の「ホシボキ」や「ホシボキ」からきていると伝えられる。その意味は「崖の下」ということだが、事実、その崖は 星置の滝から始まって星置神社を經由し、鉄道の星置駅を経て 稲穂駅近くまで延びている。高さ30~40mもあろうか。傾斜は結構きつい。

この崖は、もともと 星置川が造った扇状地に海が侵食してきて、扇状地の末端を削ってできたものだと言われている。扇状地そのものは、星置川が 手稲山北嶺から運んだ砂礫でできたものだが、その生成自体、気が遠くなるほどの長い時間を要したことは言うまでもない。完成された扇状地の頂点（扇頂）が星置の滝 辺りにあるのに対して、末端（扇端）は函館本線を越えて北へ、だいぶ遠くまで延びていたとされる。そのような状態がこれまた長く続いた後、崖の先が現在の線路傍まで短くなるのは、今から約6,000年前のこと。海が急速に内陸に広がる「縄文海進」と呼ばれる現象の中で起きたのだった（海面上昇による海食）。

改めて自然が持つ壮大な力、現象に圧倒されるとともに、畏敬の念すら抱かされる。

崖の上に立って目を瞑ると、崖下まで打ち寄せてくる波の音と その先に広がる大海原が浮かんでくる。

村元 健治（手稲郷土史研究会 会員）



星置駅—稲穂駅間で見られる崖

## 手稲区 30 周年の記念イベントに“クイズ”で協力！

11月10日、手稲区誕生30周年を記念するイベント『ていねっていいね！私を感じる手稲の魅力』が区民ホールで開催され、手稲区親善大使の三浦雄一郎氏のスペシャルトークやワークショップなどが行われました。手稲郷土史研究会も手稲区総務企画課に協力し、小学生向けの「手稲にまつわる〇×クイズ」の問題を提供しました。



手稲区 30 周年  
ロゴマーク

クイズの中から、いくつかご紹介しましょう。Q1 手稲山は冬季オリンピックの会場になったことがある。Q2 手稲にはかつて飛行場があった。Q3 手稲（軽川）から石狩（花畔）まで「電車」で人や荷物を運んでいた。Q4 新川は自然にできた川である。Q5 新川の近くでは縄文人が住んでいた跡が見つかっている。Q6 手稲鉱山は宝の山で金・銀・銅のほかダイヤモンドも産出した。Q7 前田という地名は旧加賀藩のお殿様が開いた「前田農場」からとったものである。Q8 前田森林公園は自然に生えていた森林を利用したものである。Q9 山口の「バツタ塚」は異常発生し農作物に被害を与えたバツタの卵を集めて土中に埋めた跡である。Q10 手稲区にはマスコットキャラクターがいて名前は「ていぬ」である。——もちろん、当研究会の会員の皆さんは全問正解ですね？

[答え] Q1 から順に〇〇×〇×〇×〇〇 ※イベント時の出題の有無はわかりません。



★ **謎の作家・柿本良平に関する研究書** 北海道開拓に奮闘する人々の姿を描いた三部作『石狩の歌』、『十勝の春』、『北の巨人 依田勉三』を、昭和17～18年に出版した柿本良平という作家がいました。その生涯に関する手がかりはほとんどなく、作品についての論評も皆無に等しいと言われていました。手稲郷土史研究会では平成25～27年、当時の分科会「文芸サークル」の読書会においてこれらの作品を取り上げ、作家の意図と作品の背景を探ってきました。その後も当研究会の茂内義雄顧問らによって調査・研究が進められ、本年、『北海道開拓と満州移民 — 「柿本良平」の三部作を読む』として出版されました。

A4判、127ページ、軽川郷土資料調査室発行、1,000円（税込）。購入のお申し込み・お問い合わせは、電話またはファックスにて 茂内顧問（011-681-4057）まで。

★ **手稲区保護司会の記念行事に協力しました** 11月8日、手稲区保護司会30周年記念式典が区民ホールにおいて開催され、席上、「手稲の今と昔」と題したシンポジウムが持たれました。手稲郷土史研究会の会員4名がこれに協力し、それぞれの研究テーマに沿って話題を提供しました。

★ **「手稲歴史年表」の追補版を編集しています** 手稲郷土史研究会では、幕末から平成21年までの手稲にまつわる出来事を年表にまとめ、平成22年1月に『史料に見る手稲今昔～手稲歴史年表』を発刊しました。現在、その追補版とするべく平成22年以降の事象について有志が調査を行っており、今年度中にまとめることをめざしています。

★ **手稲郷土史研究会の冬季の定例会の開催時刻が変わります！** 12月より明年3月までの手稲郷土史研究会の「定例会」の開催時刻が、午後1時30分からとなります。これは、会員の構成年齢に照らして冬季の夜間の路面状況などを考慮したもので、実験的に変更することを当研究会の理事会において決めました。一部の会員にはご迷惑をおかけしますが、どうかご理解ください。

次回定例会 ⇒ 発表内容「前田の歴史 拾い読み」／永井道允（手稲郷土史研究会 会長）／

12月11日（水）13:30～／手稲区民センター3階 視聴覚室／当研究会の会員でない方の聴講も可